

ジョン万次郎から学ぶこと

福田 隆三

1 誕生

万次郎は、1827年(文政10)1月23日、現在の土佐清水市で生まれた。9歳の時に父親が5人の子供を残して病死し、兄は体が弱かったので、万次郎が家計を助けなければなりませんでした。

万次郎が14歳の時、高知から西南に20キロメートルほど離れた宇佐浦の漁船に乗り働き始めました。宇佐はローマ字で「USA」と書くので、この時からすでにアメリカとの縁があったのかもしれない。

2 遭難

4日後の27日、万次郎たち5人の漁師が宇佐近海で漁をしていた時、突然の嵐に遭った。

8メートルほどの小さな舟は、荒海の中で何度も転覆しそうになった。櫓も折れて自由が利用できなくなり、どこに流されるのか不安ばかりが募り、みぞれの降る中を、食料も水もない6日間の生死のはざまの漂流でした。

黒潮は普通日本列島に沿って北上しますが、時として蛇行して大きく南へカーブすることもある。幸いにもこの黒潮の大蛇行により伊豆諸島最南端の「鳥島」という絶海の孤島に流されて助かった。

3 「鳥島」

漂流民のその後

(1)筆乃丞(伝蔵と改名)37歳万次郎と帰国、

(2)虎右衛門 25歳ハワイに残る

(3)重介 24歳 ハワイで病死

(4)五右衛門 15歳万次郎と帰国

(5)万次郎 14歳 25歳で帰国母と会う。お墓が造られていた。

「鳥島」は足摺岬から南東に750キロ。東京と小笠原諸島の間中に位する無人島であった。「鳥島」は絶壁に囲まれており、舟は岩にぶつかり大切な釣り道具や「火打石」もなくなっていた。5人は奇跡的に無事だった。その後、万次郎は「決してあきらめない」と常に言っていたことから、この時の体験から出た言葉であろう。

4 「鳥島」の歴史

明治以降2回の噴火があり、形は当時のものと変わっている。ほぼ円形をし

ており周囲 8, 5 キロメートルの火山島である。大きな樹木はなく、グミ、イタドリという草木しかない。万次郎たちは洞窟を見つけ仮の住処とした。漂着した例は明治以前の記録によると、15 例がある。

ここで 19 年間も過ごした記録もある。万次郎たちは約 4 か月であった。古い井戸やお墓らしいものも残っていた。もしかしたらと落胆した。とにかく食べるものを手に入れて、仲間を勇気つけた。

島にはアホウドリと呼ばれる海鳥が生息していた。羽を伸ばすと 2 メートルを超え、体重は 5~7 キロの白い大きな鳥でした。火がないので生で食べた。漁師であるが釣り道具がすべて流されて魚を捕ることもできなかった。暖かくなるとアホウドリも北に向かつて次々と飛び立っていく。

食べるものがなくなり苦しい生活が 143 日も続いた。その時、南東に大きな船が現れた。万次郎一行には気が付かず、去って行った。「もしかしたら山陰に隠れているかもしれない」と思い、山道を降りた。案の定、大きな船が停泊していた。船から 2 般のボートが島に近づき全員無事救助された。

5 救助船は

万次郎たちを救助してくれたのはアメリカの捕鯨船でマサチューセッツ州ニューベッドフォードを母港とするジョンハラウンド号でした。日本人には今まで見たこともない大きな船でした。

船長の名前は、ウィリアム・ホイットフィーノレド。この船長と万次郎との出会いが、その後深く長い運命的な絆ができた。船長 37 歳、万次郎 14 歳でした。

6 「航海日誌」には

1841 年 6 月 27 日日曜日 島が見える。この島にウミガメがいるかどうか探すために、午後 1 時に 2 般のボートを降ろす。島には遭難して疲れ果てた 5 名の者がいるのを発見し、本船に収容した。飢えを訴えているほか、彼らから何も理解することはできなかった。」

「6 月 28 日午後 1 時に島に上陸し 5 人が島においてきた衣服などを取りに行く」この日誌からもわかるように、捕鯨船はウミガメの卵を乗組員の食料用のタンパク源としようとして鳥島に上陸したのである。偶然、万次郎たちを発見し、救助したのである。

運命的な出会いがあることを教えてくれた。

7 万次郎のアメリカ行き

万次郎のニックネーム「ジョンマン」は捕鯨船の乗組員が船名「ジョン・ハ

ウランド号」と「万次郎」を合わせてつけたものである。万次郎自身もサインで「JOHN MUNG」としてアメリカで使っていた。

捕鯨船は5人の漂流民を乗せて、捕鯨を続けながらハワイのホノルルに寄港した。当時のホノルルは環太平洋地域の情報の中心的な存在であり、月に何十隻もの捕鯨船が出入りし、飲み水や食料を補給する基地でした。そのため船長はハワイから中国行の舟に乗れば日本へ帰る可能性があると考えた。5人の日本人を船から降ろした。

万次郎の機敏な行動を見ていた船長は彼をアメリカに連れて行きたいと思った。好奇心旺盛な万次郎は喜んでアメリカ行を承諾した。わずか14歳の少年が仲間と別れ、日本語の通じない未知の国へたった一人で行くことになった。相当な勇気と決断が必要であった。そして、その後の開国の先駆けになったとは、当時の万次郎自身も思いもしなかっただろう。

8 アメリカの捕鯨業

母船となる捕鯨船にはマストの先には「カラスの巣」と呼ばれる「見張り台」があり、そこからクジラの潮吹きを探した。発見するとすぐ6人乗りのボートを4般ほど海面に降ろし、クジラ取りたちが小さな鋸(もり)を持って大きなクジラへ立ち向かう。それは大変危険な作業でした。

「死んだクジラか、ぶっこ壊れたボートか」「クジラを殺すかそれともクジラに殺されるか」と言われるほどの危険極まりない仕事であった。

ニューベッドフォードには世界最大の捕鯨博物館がある。当時の捕鯨の様子がよくわかる。日米交流150周年記念として、2004年(平成16年)4月から約1年間、「太平洋の出会い～アメリカ捕鯨、万次郎、そして日本開国」という特別展が開催された。当時たった一人で万次郎がアメリカへ行き、どのような生活をしていたのかが広く紹介された。

9 クジラの効用

仕留めたクジラは本船に横付けされて、皮下脂肪を剥ぎ取り甲板に引き上げる。細かく刻んで大きな釜で煮る。液体の油になったものをオーク材の樽に詰める。当時のアメリカ人には肉を食べる習慣がなく、クジラの油は、ロウソクやランプの油となり機械油として必要だった。ガス灯が普及するまでは世界中の暗闇を明るく照らしていたのはクジラの油でした。クジラさま様でした。クジラに感謝しましょう。と当時は言われていた。

10、船長の家での生活

捕鯨船は1843年(天保14)5月6日、母港のニューベッドフォード港に無事

到着した。鳥島で出会ってから2年近くになる。船長の家は港の隣フェアヘーブンという大変美しい港町でした。現在はボストンから車で1時間ほどかけて行くことができる。

万次郎の時代から223年前の1620年メイフラワー号がイギリスからわたってきた清教徒たちを上陸させたプリマスはすぐ近くである。万次郎が過ごした船長の家は現在でも萌家の大切な拠点となっている。

1987年(昭和62年)には現在の天皇皇后両陛下が日米友好関係の発祥の地としてご訪問、両家の歓迎を受けられた。

11 万次郎、副船長となる

ジョン・ハウランド号に乗っていたアイラ・デービスという人が、フランクリン号という捕鯨船の船長として日本方面に行くというので、万次郎を誘った。躊躇する万次郎を乗船させたのは、ホイットフィールド船長の夫人でした。

1846年(弘化3年)5月、万次郎はフランクリン号でニューベッドフォード港を出発した。

太平洋で捕鯨をしている間にデービスが精神病になり、フィリピンのマニラで下船させた。新船長の選挙が行われた。万次郎はエーキン航海士と同数でした。年長のエーキンが船長となり、万次郎は副船長として活躍した。

3年4か月の航海を終えて、1849年(嘉永2年)9月、無事帰ってきた。ホイットフィールド船長は万次郎を称賛した。万次郎20歳の時でした。この航海で世界に通じる日本人として成長したのでした。

12 アメリカのゴールドラッシュ

フランクリン号で捕鯨から帰ると、アメリカは空前のゴールドラッシュに湧き返っていた。万次郎は日本への帰国を実現する資金として稼ぐことを思いたち、金山へ向かった。

1849年11月27日にニューベッドフォードを出港し、西海岸サンフランシスコから川船で丸1日かけて、金山の入り口サクラメントについた。さらに荷物を馬に乗せて厳しい山を5日間かけて歩き金山に入った。

70日間働いて600ドルを稼いだ。当時の水夫の月給が17ドルだったので、かなりの大金でした。

金山は盗賊が多く、銃で殺して大金を奪う物騒な状況でした。万次郎もピストル2挺を身に着けての生活でした。

ただ一人の日本人として、鎖国時代の日本人とは思えない生き方をしていたのでした。

1 3 漂流仲間との再会

日本への帰国資金を蓄えた万次郎は、船でサンフランシスコからハワイに向かった。ホノルルで漂流仲間と再会した。

寅右衛門はハワイに残り、ハワイ最初の移民として暮らした。重助はすでに亡くなっていた。日本へ帰国したのは伝蔵、五右衛門、万次郎の3名となった。

当時の日本は鎖国ですから、外国船は近寄れず、薩摩藩の支配下にあった独立国琉球王国(現在の沖縄)にいったんボートで上陸する計画でした。丁度サラボイド号という船がハワイから中国上海に行くという情報を得て、船長のホイットモアに頼み、無給で働くことを条件に承諾を得て、帰国の途につく計画を立てた。ボートを購入し「アドベンチャー号」と名付けた。

1 4 ハワイの恩人

ハワイ滞在中に万次郎を親身になって支援してくれた人がいました。「サミエル・デーモン牧師」です。捕鯨船の船員は3~5年続く過酷な労働で発狂する人もいた。船内でも人種差別があり、デーモン牧師は人種差別のない世界を求めて布教活動をしていた。襟着した捕鯨船を迫害する日本の鎖国対策に反対していた。万次郎に開国の必要性を感じさせたきっかけになった。

牧師は万次郎の帰国準備に協力をした。デーモン牧師と万次郎が出会ったのは合計4回である。1回目はフランクリン号の副船長としてホノルルに立ち寄った時。2回目は金山で帰国資金を得て、ホノルルで仲間と帰国計画をたてた時。3回目は威臨丸で渡米した帰り。4回目はデーモン牧師が来日した時。このような奇跡的な事実には強い絆を感じる。しかもコマーシャルで有名な「この木なんの木」はオアフ島のモアナルアアーデンパークにあり、デーモン家の所有である。

1 5 日本への帰国

万次郎たち3人を乗せたサラボイド号は沖縄に向った。1851年2月3日(嘉永4年1月3日)に沖縄の摩文仁(まぶに)から約10キロ離れたところに到着、午後4時ころ3人は降ろされ、船は上海に向けて去って行った。

万次郎が鎖国中危険を侵して(死刑の可能性も)帰国を決意した理由は母に会いたかったこと。アメリカ文化を日本に伝えたかったこと。日本人である自分はどうしても帰りたい一心であった。遭難して丁度10年、万次郎は24歳になっていた。

1 6 取り調べ

期間と場所は、万次郎たちが危険人物であり、重要人物とされて琉球では8

ヶ月間。薩摩(鹿児島)では、2ヶ月間、長崎では9ヶ月間。土佐(高知)では2か月半と約2年半もかかった。琉球での取り調べは、身の回り品の押収と尋問。役人の高安家では温かいもてなしだった。

17 藤摩(鹿児島)と長崎での取り調べ

当時の藩主島津斉彬は積極的に西洋文化を取り入れていたので、斉彬は万次郎から興味深くアメリカ事情を聞いた。時には酒を酌み交わして歓談した。万次郎からは航海術、造船術を聞いた。また、

次は長崎に移送され、9か月にわたる同じような取り調べがあった。

18 帰郷一母と会う

万次郎が日本へ帰国し、2年半の取り調べの後、母に会えたのは1852年(嘉永5年)11月16日で、万次郎25歳の秋でした。母も兄弟もみな健在でした。

11年間も音信不通の万次郎はすでに死んでいると思い、お基まで作っていたのは当然であったろう。

19 ペリー浦賀に来航

1853年(嘉永6年)6月3日、軍艦4隻浦賀に来航。フィルモア大統領の国書を持参した。翌年回答を求めてくることを告げて帰る。今度は7隻で来航し、「日米和親条約」「日米修好通商条約」を締結した。

さらに、オランダ、ロシア、イギリス、フランスとも同じような不平等な条約を結んだ。条約には万次郎を通訳にはしなかった。アメリカに有利な通訳をするのではないかと疑われスパイ扱いをされた。条約を批准するために、ポーハタン号の護衛艦としての威臨丸(艦長勝海舟)が随行した。その時は万次郎が通訳として活躍している。

20 デーモン牧師と再会

威臨丸がサンフランシスコに停泊中に、万次郎はお土産を買った。カメラ、辞典、書籍など。同乗していた福沢諭吉とともに有名なウェブスター辞書を購入した。アメリカの新聞は大きく取り上げていた。帰国途中ハワイに立ち寄り、10年前にお世話になったデーモン牧師に再会し、お土産として、万次郎が翻訳した「航海書」と脇差を送った。今でも大切に保管されている。

21 船長との劇的再会

1870年(明治3年)万次郎は6名とともにヨーロッパ視察を言い渡された。途中ニューヨークへ立ち寄り、ホイットフィーノレド船長と20年ぶりに再会。

船長 65 歳、万次郎 43 歳。最後の再会となった。

22 万次郎の最期(参考文献当日紹介します)

イギリスに到着した時、足に腫瘍ができ途中で帰国した。1898 年(明治 31 年)11 月 12 日波乱に富む人生を、長男東一郎の家で静かに 71 歳の生涯を閉じた。大好物は「うな重」でした。